

令和5年度 授業改善実践研究校（家庭科）報告書 宇品小学校

1 学校の課題

(1) 大規模校であることから

本校は、児童数1152人（R5.5.1現在）の大規模校であり、価値観や生活環境が様々な児童が在籍している。一人ひとりの児童の活躍の場を広げることや、個に応じたきめ細かな指導をしていくことについて、意識的に取り組んでいく必要がある。そのためにも、経験年数や専門教科が多岐に渡る多くの教職員が意思疎通を図りながら、専門性を発揮できるよう体制を整え、取組を行っていくことが大切である。

(2) 昨年度の研究課題から

昨年度は、「子供が輝く授業」の実現を目指して、どの教科にも通じる「学びに向かう姿勢」と各教科の資質や能力につながる「各教科で付けるべき力」を育成する授業改善を行った。その際、ICTの効果的な活用場面を探究することにも努めた。授業研究を通して以下のように成果（○）と課題（▼）をまとめた。

- 児童が他者とかかわり合いながら、学び合うことに充実感を持つこと【学びに向かう姿勢】
- 各教科で付けたい力が定着してきていること【教科で付けるべき力】
- ICTの活用により、以前に比べて学び方の幅が広がり、児童自身が主体的に学んでいること【ICTの活用】
- ▼ 学年が上がるについて、学習内容に興味・関心を持っていない児童が増加していること【学びに向かう姿勢】
- ▼ 各教科の学びを生活場面につなげたり、広げたりすること【教科で付けるべき力】
- ▼ ICTを効果的に活用するための、さらなる環境づくりが必要であること【ICTの活用】
 - ・通信環境の整備
 - ・児童のタイピングや操作技能の向上、情報活用能力（リテラシー）、規律の徹底
 - ・学級全員の児童の考えを瞬時に見取り、授業に反映させること、ICTの活用が目的にならないようにすることなど、教師の授業力の向上

以上を踏まえ、今後は、成果である「一つの手立てとしてICTを効果的に活用すること」を取り入れながら、『学びに向かう姿勢』においては、高学年児童において「学習したことから、もっと調べたい、知りたい、やってみたい、行ってみたいと思える姿勢をもつこと」を重視し、『教科で付けるべき力』については「授業での学びを実生活に活用できる力を育成すること」に重点を置き、授業改善をしていくことに展望がある。

(3) 令和4年度「全国学力・学習状況調査」から

国や県の平均正答率は上回っているが、本校の実態として捉えたときに、学習したことと生活場面を結び付けて考える力や、理由や根拠を説明する力に課題が見られる。

表1 「令和4年度 全国学力・学習状況調査」の結果

各教科	国語 平均正答率			算数 平均正答率			理科 平均正答率		
	自校	県	国	自校	県	国	自校	県	国
R4結果	77	67	65.6	71	65	63.2	73	66	63.3
知識・技能	82.3	72.4	70.5	76.5	68.4	68.2	72.9	65.2	62.5
思・判・表	72.7▼	63.8	63.8	64.5▼	58.1	56.7	73.7	66.0	63.7
選択式	81.3	73.7	71.8	60.5▼	52.4	51.8	75.6	68.7	66.8
短答式	77.3	64.9	63.6	84.3	76.8	76.5	78.5	70.0	66.2
記述式	64.5▼	53.4	51.3	67.8	61.9	60.2	60.5▼	50.8	47.3

2 研究主題

主体的に課題に向かい、対話によって学びを深める児童の育成

～ICTを効果的に活用した「学びに向かう姿勢」と「教科で付けるべき力」の育成を目指す授業づくり～

3 取組内容

(1) 研究体制の構築

専門教科や経験年数が多岐に渡る多くの教員が所属していることや、教科担任制による校内体制を確立してきたことを生かし、従来の学年を母体とした研修体制から、各学年のメンバーが所属する7教科の教科研究チームを母体とする研究体制を構築した(表2)。教員は交換授業や専科による授業など、自身の担当教科を中心に、教科研究チームに所属した。各教科のチームリーダーを中心に月1回のチーム研修会を行い、児童の実態や各教科の特性を踏まえて指導の効果や課題を教科チーム内で共有し、学年でも連携を図り、縦と横のつながりを深めながら授業改善を進めた。

また、各教科研究チームにおいて校内全体研究会と公開研究会で授業提案を行い、協議会による意見交流や講師による指導・助言から、成果や課題を共有しながら授業改善に取り組んだ。

表2 教科研究チーム

1	2	3	4	5	6	7
国語科	社会科 生活科	算数科	理科 生活科	図画工作科	家庭科 音楽科	わかば

(2) 学びを実生活場面に活用できる「単元(題材)づくり」や「授業づくり」の工夫

授業改善では「子供が輝く授業」の実現を目指して、『学びに向かう姿勢』は、「学習したことから、もっと調べたい、知りたい、やってみたい、行ってみたいと思える姿勢」、『教科で付けるべき力』は「授業での学びを実生活に活用できる力」と定義し、これらの育成に向けた手立てを講じた。特に、授業では、『教科で付けるべき力』の育成につながる「よりよい生活」や「充実した生活」をテーマに7つの教科チームに分かれて授業改善を行った。具体的には、単元(題材)導入時に児童と共に単元(題材)を通して課題を設定し、単元(題材)のゴールを共有した。単元(題材)のゴールでは、単元(題材)を通して積み上げてきた学びを活用して、生活場面につながる課題を解決するような学習の場を設定し、「単元(題材)づくり」や「授業づくり」の工夫を行った。また、児童がわくわく感を持って単元(題材)のゴールに向かうことができるよう、単元(題材)名にも工夫を行った。例えば、家庭科「こんだてを工夫して」の学習では、導入場面で一人ひとりの児童が自身の生活を見つめ直し、自分の課題を設定した。題材のゴールでは、お弁当作りを通して、自身の設定した課題を解決する学習を行うことを見据えて「こんだてを工夫して～わくわくお弁当大作成!!～」という題材名のもと、学習を積み上げていける「題材づくり」と「授業づくり」の工夫を行った。その際、栄養教諭と連携を図りながら授業を行った。

(3) ICTの効果的な活用場面の探究

学習指導案において、各教科の特性や毎時間のねらい達成に向けて、記録や振り返りの蓄積、学びの共有、学んできたことの想起などにおいて、ICTの効果的な活用に努めた(※資料参照)。特に、題材のゴールでは、児童のこれまでの学習の蓄積を学習支援ソフトミライシード「オクリンク」の「自分ボックス」から取り出しながら学習を進めていけるような授業づくりを工夫した。そのため、毎時間の学びや振り返り等を「自分ボックス」に保存し、学びの蓄積を大切にした。

(4) 校内研修会の充実

月1回の教科チーム研修会に加え、定期的に指導教諭による国語科研修会、ICT活用研修会、採用6年未満の教職員を対象とするプラスステップ研修会を実施した。また、夏季休暇中には、各教科チームの授業提案に向けて2日間の検討会を持ち、講師の先生を招いたり、教科を専門とする他校の先生方を訪問したりするなど、チーム研修会の充実に努めた。さらに、多方面から外部講師を招聘した研修会を実施し、教員の資質向上に努めた。

4 検証結果

※ 検証結果は、家庭科の研究授業を行った第6学年児童を対象に変容を測った。

(1) アンケートによる児童の変容

① 「学びに向かう姿勢」

「学習したことから、もっと調べたい、やってみたい、行ってみたいと思います。(学びに向かう姿勢)」について、1月のアンケートでは、児童の肯定的な回答が3ポイント減少した(表3)。しかしながら、家庭科の研究授業を実施した学級において単元学習後に行ったアンケートでは、100%の児童が肯定的に回答した。

表3 『学びに向かう姿勢』についての児童アンケートによる肯定的評価(第6学年児童)

内 容	6月	1月
学習したことから、もっと調べたい、知りたい、やってみたい、行ってみたいと思います。	86%	83%

② 「教科で付けるべき力」

アンケート内容「家庭科で学習したことを、他の教科や学習にいかしています。(教科で付けるべき力)」について、1月のアンケートでは、肯定的な回答が4ポイント増加した(表4)。家庭科の研究授業を実施した学級において単元学習後に行ったアンケートでは、94%の児童が肯定的に回答した。記述アンケートにおいて、児童は生活場面に結び付けていることを具体的に明記している(表5)。

表4 『教科で付けるべき力(家庭科)』についての児童アンケートによる肯定的評価(第6学年児童)

内 容	6月	1月
学習したことを、他の教科や学習にいかしています。	87%	91%

表5 『教科で付けるべき力(家庭科)』についての記述児童アンケート(第6学年児童一部抜粋)

【家庭科】学習したことを、他の学習や生活にいかしています。
<ul style="list-style-type: none"> ・お家で料理の手伝いをするようになった。 ・栄養バランスを第一に考えて食事をするようになり、好き嫌いをせずに食べるようにしている。 ・自分の課題が見付き、課題を解決することを考えて食事をとるようになった。 ・人参を入れたり、お皿の色を考えたりするなど、料理や盛り付けの際には、彩りを考えるようになった。 ・お家で、卵焼き、パンケーキ、カレーライス、お弁当などを自分で作った。 ・感謝の気持ちを持ち、食事をするようになった。 ・調理実習で学んだ計画を立てたり、見通しを持って行動をしたりすることを生活の中で生かすようにしている。

③ 「ICTの効果的な活用」

ICTの活用については、6月から80%以上の児童が肯定的に回答している。1月に実施したアンケートにおいては、90%以上の児童が肯定的に回答している。

表6 『ICT活用』についての児童アンケートによる肯定的評価(第6学年児童)

内 容	6月	1月
1. 情報収集や記録の一つの手段として、写真や動画の撮影をしています。	89%	96%
2. 記録や写真をクラス全体で共有して、学習を深めています。	87%	92%
3. 各教科でICTを使って、学習の効率が上がっていると思います。	87%	94%

5 研究成果

成果(○)と課題(▼)をまとめると、次の通りである。

(1)「学びに向かう姿勢」について

(学習したことから、もっと調べたい、知りたい、やってみたい、行ってみたいと思える姿勢)

○児童が学びを自分事として捉え、前向きに学習に向かっている。

▼教科や単元(題材)、学習内容によって、児童の学習に向かう姿勢に差がある。

(2)「教科で付けるべき力」について

(授業での学びを実生活に活用できる力)

○児童の学びが、他の教科や実生活の活用につながってきている。

▼一人ひとりの児童の学習状況に差がある。

(3)「ICTの効果的な活用の探究」について

○教師、児童共にICTの技能面に課題がなくなり、タブレットの使用が日常化し、教師が必要な場面や効果的な活用場面を判断でき、便利な道具の一つとして効果的に活用することができるようになってきた。また、そのことで、児童の学び方や、教師の授業づくりの幅が広がっている。

▼教師により、授業での活用に差がある。

以上の成果と課題を踏まえ、今後の展望を次のように考える。

「単元(題材)づくり」や「授業づくり」の工夫を行った授業において、児童は学びを自分事として捉えており、「学びに向かう姿勢」が前向きである。「教科で付けるべき力」においても、教師が付けたい力を明確にし、「単元(題材)づくり」や「授業づくり」を行った授業については、「教科で付けるべき力」の育成が見られる。しかしながら、児童の学びは持続的、継続的なものであり、「学びに向かう姿勢」や「教科で付けるべき力」は一つの教科や単元(題材)で付ける瞬発的な力ではなく、持続するものになってこそ、本当の力になると考えられる。どの教科や学年、単元、題材においても、児童が学習したことから、「もっと調べたい、知りたい、やってみたい、行ってみたい」と前向きに学び、学びが実生活に活用される力につながっていることを実感できるよう、引き続き、「単元(題材)づくり」や「授業づくり」の工夫を行っていきたい。「単元(題材)づくり」や「授業づくり」の工夫は、児童の実態や学年、単元、題材によって、無限に可能性がある。一人ひとりの児童の実態を把握した上で、付けるべき力と学習のゴールを明確にし、そこに向かう「単元(題材)づくり」や「授業づくり」を行っていくことの可能性を広げていきたい。その際、他校種や専門家、企業など新たな視点を加えて、アイデアや発想を生かしながら授業改善を推進していくことは、授業づくりの可能性が広がり、児童の学びが「実生活」から「未来や将来」につながっていくことに展望があると考えられる。また、ICTの効果的な活用によって、教師の授業づくりや児童の学び方の幅が広がっている。今後も児童が主体的に学ぶことができるよう、ICTを効果的に活用し、学級全体で学びを共有したり、児童が学び方を選択したりできる場面を大切にしながら、授業改善を推進していきたい。